利用者名：医療保健学部　リハビリテーション学科　作業療法学専攻　教授　友利 幸之介

Scopus

Title:	Developing an English-language ADOC-S for collaborative goal setting in schools: a Delphi study of cultural reconstruction and content validation
論文名（和訳）	学校における協働的な目標設定のための英語版 ADOC-S の開発：文化的再構成と内容妥当性の検証を目的としたデルファイ研究
Authors:	友利 幸之介（東京工科大学 教授）、Kana Kubota（東京かつしか病院）、Yuto Imai（東京工科大学）、Yuho Okita（Swinburne University of Technology）、Kayoko Takahashi（北里大学）、Yasushi Kusumoto（福島県立医科大学）、Fiona Graham（University of Otago）
Journal:	Irish Journal of Occupational Therapy
掲載年月	2026 年 4 月（オンライン掲載）

研究概要：本研究では、学校で子ども・保護者・教員が一緒に目標を決めるための iPad アプリ「ADOC-S」について、英語圏で使える内容になっているかを検証しました。5 か国 14 名の作業療法士の専門家に、68 の活動項目とそのイラストを 2 回にわたって評価してもらいました（デルファイ法）。その結果、項目とイラストを英語圏の学校生活に合わせて作り直し、53 項目からなる英語版を確定しました。

研究背景：学校で働く作業療法士には、子ども本人・保護者・教員の考えをすり合わせ、共通の目標を立てる役割が求められています。ADOC-S は、日常の活動を描いたイラストを選びながら目標を話し合えるよう、私たちが日本で開発したアプリです。日本では、短い関わりでも教員による評価が改善することが報告されています。一方で、生活や学校の習慣は国によって大きく異なります。イラストを使う道具は、言葉を訳すだけでは海外で通用しません。そこで、ニュージーランド・オーストラリアの研究者と連携し、英語圏で使える内容へ作り直すことにしました。

研究方法：学校や小児の領域で 3 年以上の経験をもつ作業療法士を、専門家として募りました。専門家は、英語の説明動画を見てアプリを操作したうえで、各項目とイラストが自国の学校での目標設定に適切かを 3 段階で評価しました。85%以上が「適切」または「修正すれば適切」と答えた場合を合意としました。「修正すれば適切」を選んだときは、理由の記述を必須としました。寄せられた意見は研究チームが一件ずつ検討し、修正案を作りました。修正した項目は 2 回目の調査で再評価しました。

研究成果：1 回目には 14 名（米国 8 名、ニュージーランド 3 名、英国・オーストリア・スウェーデン各 1 名）が参加し、220 件の意見が寄せられました。68 項目中 67 項目は合意基準を満たしましたが、意見をもとに大幅な見直しを行いました。たとえば「昼食」は、カレーの給食の絵から、カフェテリアで食事をする場面に描き直しました。「移動」には車いすを使う子どもを加えました。日本の学校で一般的な「学校の掃除」のように、英語圏では行われない活動は削除しました。最終的に 49 項目を修正、16 項目を削除、1 項目（動物とふれあう）を追加し、22 枚のイラストを描き直しました。2 回目の調査では、見直した 37 項目のすべてが合意基準を満たしました。

社会への影響：英語版 ADOC-S により、英語圏の学校でも、子ども本人の希望を目に見える形にしながら、保護者や教員と一緒に目標を決められるようになることが期待されます。また本研究は、イラストを使う道具を海外へ広げるには、翻訳ではなく文化に合わせた作り直しが必要であることを示しました。今後は、アプリに英語版を実装し、実際の子ども・保護者・教員を対象に、分かりやすさや使いやすさを検証していきます。

専門用語：

ADOC-S：日常の活動のイラストを使い、子ども・保護者・教員が協働して目標を決めるための iPad アプリ（Aid for Decision-making in Occupation Choice for School）。

デルファイ法：専門家への匿名のアンケートを何度か繰り返し、意見を集約して合意を形成する研究方法。

内容妥当性：道具に含まれる項目が、測りたいことや使いたい場面に対して適切で十分かどうか。
共有意思決定：専門職と本人・家族が情報を共有し、話し合いながら一緒に方針を決めること。